



風のかたみ

福永武彦

新潮社
版

昭和四十三年六月二十日 印刷
昭和四十三年六月二十五日 発行

著 者 福 永 武 彦

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一二(大代)
振替 東京 八〇八番

(凡丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

長編王朝小説

『風のかたみ』目次

嵐	幻	影	雪	百	笛	姫	し	す
の				鬼			な	す
				夜			の	き
前	術			行			人	野

一四	二三	二三	七	六	五	四	三	セ
----	----	----	---	---	---	---	---	---

い さ ら 川	火 焰 の 中	東 の 獄	破 滅	胡 人 月 に 向 つ て	渦	背 信	恋 の み だ れ	虚 実
三三	三五	三六	三七	三九	四〇	四一	四二	四三

函 装

「三十六人歌集」料紙覆刻

田 中 親 美

風
の
か
た
み

すすき野

一

見わたすかぎり枯れ枯れとした尾花ばかりが連なっている野中の一本道を、武士らしい身ごしらえの一人の若者が、徒で急ぎ足に歩いていった。時刻は既に申の刻を過ぎてもしようか、空は濃く薄く墨を流したように濁り、太陽の在りかも分らない。まだ本降りにはならないが、時折烈しく吹きつける風に乗って冷たい滴が頬を濡らす、するとそのたびにあたりは一段と暗くなるようである。右を向いても左を向いても、波の穂をなしてうねうねと続く芒の原で、その尾花も秋風におおかたは吹き飛ばされたものの、夕闇の近づくにつれて白波のように風に靡き伏している。ただ前後に一筋、おのずから旅人が踏みかためたために道らしいものが通じていて、それさえも黝ずんだ原の彼方にやがて溶け入るように見えなくなった。

若者は足を休めて、伸び上って前を見、また後ろを見たが、この涯もなくひろがる原のなかに、人影はおろか、生きものの姿一つなかった。聞えるのは凄まじいばかりの風の音、時折はそれに加えて芒を打つ雨のささやき、ふと無気味な聲で響くのは遠くで狐が鳴いているに違いない。

しかし若者の顔つきには、格別動じた様子もない。気にはかかるらしく眉をひそめてはいたが、

その肩も精悍なら、眼光も鋭い。旅仕度らしく狩衣の上に猪の毛皮を纏い、指貫を穿き、腰にはやはり猪の毛皮でつくった尻鞆の太刀を横たえ、背には胡縁を負い、強弓を杖のように手に握っていた。鹿の皮の沓を履いていたが、徒歩きにしてはこの沓は花車にすぎ、どうも馬や従者の見えないのが不審に思われる程のしつかりしたいでたちである。しかし誰一人見る者とてもない芒の原で、しかも日の沈むのも、もう間もない。

若者は氣を取り直してまた大股に歩き出したが、空を仰ぐはずみに、ふと、風に靡く芒の彼方の、道よりも右手のやや小高くなつたあたりに、何やら人家らしいものを認めた。もしや狐が化かすのかと夕闇の漂うなかをじっと眼を凝らすと、どうしても古ぼけた庵か堂のように見える。ありがたいと思わず吐息を洩らしてその方へ向おうとする瞬間に、道の彼方からかすかに馬の蹄らしい音が聞えて来た。姿は見えないが、音のみは次第にこちらに近づいて来る。

若者は初め殆ど微笑を見せた。はぐれた連れが戻つて来たと思つたに違いない。しかし次の瞬間にはきつと全身を緊張させると、すかさず弓に矢を番え、少しの油断も見せず道のかたわらに足を踏まえて前方を注目した。音は次第に近づき、やがて時雨の原の向うから馬に跨つた一人の男が現れた。綾藺笠をかぶり、簑をつけた法師ふうの男で、武器は携えていない。従者も見かけない。道を遮る者があるのに氣がつくと、馬の手綱を引き締めたが、格別恐れる様子もなく聲を掛けた。

「慮外をなされますな。怪しい者ではございませぬ。」

若者は油断なく相手を見澄ましたまま、少しく弓を横に移した。その間に相手の男は鎧から下りると、手綱を引いて若者のそばまで近づいて来た。

「これはお武家さまらしいが、如何なされました。もう日も暮れますぞ。それにこの空模様で。」

簑の下には薄鈍色うすにびらうの水干すいかんに裾濃すそどの袴はかまをつけ、藁沓わらぢを履はいている。振り仰あぐように空を見たが、あたりはもうだいぶ暗くなつて笠かさのかげでは年の頃ころもしかとは分らない。野盗やどのたぐいではないようなので、若者わかしは番ばんえた矢やを外そとして、訊きいた。

「その方は何者だ。」

「はい、旅りょの法師はふしでございます。これより三河さんかの方かたへ参まゐろうとするところで、して、あなたさまは。」

「己おれは都みやこへ上ある途中ちゆうちゆうだが、連れにはぐれて困こつているところだ。」

「都みやこへお上ありならば、道みちが違ちがひましようぞ。この原はらは伊賀いげに抜ぬけるのなら近道きんどうにはなりますが、あなたさまがこのままお進すすみになれば伊勢いせへ出でてしまひましよう。近江おうみでもこのあたりは草深くさふかいところ、盗賊たうそくはもとより、狐狸こぎに野猪やじなどの棲すみかでございますからな。それ、狐きつねの鳴聲なみこゑが聞きえまするぞ。」

男おとこは若者わかしの心胆しんたんをためしてみるように、白しろい齒はを見みせて、からかうような笑わらいを見みせたが、すぐにまともな顔かほつきに戻もどつた。

「失礼しつれいを申しました。お困こりでございましよう。それでどうなされます。」

「どうしたものとと思案しりごとしていた。この先さきはまだ遠とほいのか。」

「一時ひとときや二時ふたときでは、この原はらは抜ぬけられませぬ。それに都みやこへお上ありなら、ここから引返ひきかへした方が早はやうございましよう。とまれ人家りやうかもないところ、はて日も暮くれそうな。」

「戻もどるとしてもたやすくはない。あそこに堂どうのようなものが見みえるから、宿しゆくを借かりようかと思おもつているが。」

男おとこは若者わかしの眼めを追おつて芒はらの彼方かたへ眼めをやつた。強つよく吹ふきつける風かぜとともに、大粒おほつぶの雨あめが横よこなぐ

りに面を打つ。手綱を取られた馬が心細げに嘶いた。

「これは重畳。おもひじやう わたくしも如何したものかと困こうじておりましたが、ひとつ相宿あいやどをお願いしますか。しかしあの御堂は、恐らく無人でございましょうな。この雨は夜つびで降りましようから、雨さえ凌しのげればそれが何よりでございます。お伴いたしましょう。」

気さくな男と見えて、言うより早く馬の手綱を引き、芒の中へ割つてはいった。若者は道の前をもう一度入念に見わたしたが、降つて湧いたようなこの法師のほかに人影などはさらにない。しかも雨は小歇やみなく降りはじめ、尾花の穂にしとしという雨音を立てている。若者は決心して、早くも姿の見えなくなった男のあとを追いつながら芒の原へと身を没した。

二

今にも崩れ落ちそうな古い六角堂で、人の住んでいる気配は見えない。旅の法師と称した男は横手の柱に馬を繋ぐと、堂の内外を一まわりして、漸くあとから迫り縫すがった若者に聲を掛けた。

「鬼でも出そうな、薄気味の悪いところでございすな。一樹の陰、一河の流れとやら申しますから、これでも野宿よりはましでございましょう。今のうちに火種でも探すといたしまするか。」

既にあたりは茫々と暗くなりかけていたが、男は旅馴れているものと見え、堂の近くの叢くさむらから枯木などを拾い集めている。若者は入口に登る階きざはしに足を掛けて堂の中を覗き込んだ。入口の戸はなく、中はがらんとして暗闇である。油断なく構えて中はいり、弓の端を手に持つてびゅうびゅうと音を立てて振り廻した。格別隠れひそんでいる鳥や獣もない。若者は弓を壁に立て掛け、背から胡籙やなぐいをおろした。太刀も外してやはり弓のそばに立て掛けた。

そこに例の男が片手にあまるほどの枯木を運び入れた。ばりばりと音を立てて枝を折ると、器用に積み重ねている模様である。こやつ暗闇でも眼が見えるのかと、若者が気味悪く思っているうち、早くも火打石の音、火口がぼんやりと明らんで、男は上手に火を吹いている。どうやら堂の中央に炉のようなものが切つてあるのを、予め見とどけておいたものであろうか。やがてしめった薪に火のついたところで、かまえて火を吹いているのが、いぶり出した煙のなかで赤鬼のようである。

「さあ、どうぞお当りなされませ。御気楽になされましょう。こうして御一緒するのも前世の縁でございます。わたくしめに御気兼は要りませぬ。」

若者は軽く一揖した。このような気転の利く男と同宿したことを嬉しく思っていた。炉の前に足を組み、濡れた衣をあぶっていると、男の方はまた縁の方へ出て行つて馬の世話をしているようである。既に堂の外は西の空に僅かに仄明りがあるばかり、風はようよう収まつたが雨は依然として降り続いている。やがて男は皮子や餌袋を抱えて戻つて来ると、堂の隅にその皮子を置き、若者に向い合つて炉の前に坐つた。餌袋を開いて干飯を出すと、若者にもすすめた。

「いや、御坊のせつかく用意されたものを頂いては相済ませぬ。」

「御遠慮は無用。あなたさまは先程、連れにはぐれたと仰せられましたな。連れにも、馬にも、糧にも、おはぐれでございましょう。これで宜しければ、どうかお上りなされませ。」

「忝ない。それでは。」

若者は手を延して受け取ると、干飯にかぶりついた。それまでの緊張がゆるんだところを見ると、まだどこか幼な顔の残っている若々しい顔である。法師はひとり領きながら、自分も食事を始めた。

「あなたさまは遠国からのお越しでございましょうな。」

「信濃より参った。」

「長旅ではさぞお疲れでありましょう。」

「それほどでもない。馬もいれば供もいる。」

そして思い出して眉をひそめた。

「実はそれが心にかかっている一事だが、昼すぎのこと、道に休んで、飯を取ろうとしていたところ、どうした物のはずみか繋がれた馬が驚いて走り出した。続いて控の馬も走る。供の者らは慌ててあとを追ったが、これがいつこうに戻らぬ。私も急いで探しに歩いたが、不思議なことにかき消えたように見えなくなった。要り用なものはみな馬の背につけたまま故、何とも途方に暮れてしまった。しかしその場に待つわけにもいかず、とにかく道を歩き出したが、どうやら道を誤ったものと見える。この野中にはいり込んで、どこまで歩んでも尾花ばかりで、日は暮れかかる、雨は降り出す、御坊に此所で出会ったのもつけの幸いであつた。」

「人里はなれたこのような古堂で、見知らぬ者と同宿というのは、恐ろしゅうはございませぬか。」

「恐ろしゅうはない。ただ供の者らにはぐれては、この先がどうなるやら。」

法師は食事を終つて、濡れた水干などを火に乾かしていたが、相手の顔を見て笑いながら言つた。

「御心配は要りませぬ。御馬も御供も、明日には出て参りましょう。」

「氣やすめを。」

「いや、氣やすめに申すのではござりませぬ。まことでござる。」

若者はきつと相手を見た。

「わたくしは法師の体をなしておりますが、実は陰陽道の道を窮めんとして修行の途にある陰陽師でございます。いささか法術も使えば相も見ます。あなたさまがおはぐれなされた者どもは、明日は無事現れると相にも出ております。」

若者は怪しむように、疑うように、相手の顔を見た。年の頃はそう若くはない、さりとして老人というでもない。異様に骨張った頬から頤、額は広く、眉は濃く長く両の眼の上に覆いかぶさり、鋭い眼が焚火の明りを受けて螢火のように瞳の色を明滅させている。しかしその大きな口は、悪げのない微笑を湛えて、一二本欠けた歯が、息をする度に火吹き竹のような音を立てた。

「私の相をみてくれるか。」

「おやめなされ。」

法師は軽く首を左右に振った。

「相などを見て己れが行先のことを知ったとて、何の得もありはしませぬ。人それぞれ定業あり、明日のことを知らずに暮すのが一番でございます。」

男はついと立ち上ると、「火がさびしゅうになりましたな、」と独り言のように呟いて、あたりを見まわした。

若者は氣勢を殺がれて押し黙った。乏しい炉の明りを受けて、黒々とした法師の影が壁にゆらゆらと映っている。その壁も、壁土は落ち、羽目板は朽ち、見るかげとでもない。法師はつかつかと奥へ進み、台座ばかり残っている壇のところから、物凄いい音をたてて板をひっぺがした。ついでに壁の羽目板も力まかせに引き抜いて持ち運んで来ると、炉のなかへ投げ込んだ。

「この六角堂も、もとは観音などを安置したものでございましょうかね。こう荒れ果てては観音

の思し召しもございますまい。我々が暖を取るのに役立てば、それが重畳。」

「御坊は佛罰ということを恐れぬのか。」

「何の、無人の堂の板切れの一枚や二枚。佛の慈悲は廣大無辺でござりますぞ。もっともわたくしめは法体はしておりますが、先ほども申しましたように陰陽師、鬼神を恐れても三宝を恐れることはありませぬ。」

「気の強い御坊だ。天下に恐れるものは鬼神のみか。」

「その鬼神を避ける術を知る者が、陰陽師でございます。曆を案じ、星を案じ、危きを避け、安きをもたらず。式神をお使いなされる安倍の清明さまのような方にかかつては、鬼神さえも恐れて近づきますまい。わたくしなどは拙い術をいささか使うばかり、それでもこのような人里遠いところに仮の宿りをいたしたところで、何の怖いことがございましょうや。」

「御坊は法術を使うと申されたな。」

「いささかは。」

「それはどのようなものか。」

法師は異様な笑みを見せたが、燃え上った焰に照されてその顔は一層物凄かった。

「なに、益体もないものでござる。」

「一つ見せて下さらぬか。」

「おきなされ。それにあなたさまのようなお若い方、それでなくとも空恐ろしい雨宿りに、怖い思いをするだけ御損というもの。」

「私は何も恐れぬ。これまで怖いと思ったことはない。」

「信濃よりの旅と仰せられましたな。」